

江戸の暮らしから
明治の暮らし
そして
大正の暮らしがあり
昭和の暮らしがあった
さらに
平成の暮らし
いまは
令和の暮らし

そこには
なんとか痕跡も残され
身近に感じることができる
300年の暮らしがあった
子供の頃には
一世代は20年と教わった
しかし、今は30年と長寿になっている
30年×10倍=300年

日本の伝統的な暮らしは 地球と共生していた

その300年前から始まった産業革命
その産業革命後によって何が起きたかの。

薪と木炭の火から蒸気が作られ 蒸気機関が発明され
た
さらに火力のある石炭・石油へと燃料は変わって
いった

その結果、地球上の二酸化炭素は急激に増大した

地球の温暖化は急速に進み、深刻な気候変動・地球
温暖化を招くことになったのである

ここで改めて、日本の先人たちが歩んできた作法・
知恵
に着目することが大変重要なことであることに気づ
く
たたむ・しまう・ほぞんする・室名ではなく間とい
う概念が多目的/転用を享受する

持続可能な住まいと暮らしのヒントがここにある

共催 一般社団法人エコハウス研究会
新建築家技術者集団岐阜支部

講話 丸谷博男

一般社団法人エコハウス研究会代表理事・新建築家技術者集団東京支部代表幹事

2022年 4月20日 wed 18:30~20:30 長岡市

4月21日 thur 18:30~20:30 新潟市

会費 2000円

申込先

<https://ws.formzu.net/fgen/S75519222/>

長岡会場 新潟県長岡市大手通2-6 フェニックス大手イースト4F まちなかキャンパス301会議室

電話0258-39-3300

新潟会場 新潟県新潟市中央区磯町通2086 中央公民館 301会議室

電話025-224-2088

参考資料 ◆会報「そらどま」2022年春号

<http://data.ecohouse.ac/data/newsletter-2022-spring.pdf>

持続可能な社会における住まいと暮らしのあり方を問う

一昨年の2020年は、1920年（大正9年）の分離派建築会宣言から始まる日本近代建築運動100年という節目
でした。そして太平洋戦争後77年の節目にあたり、改めて今、建築人に求められている課題、生き方を皆
様にお伝えします。ここで言う「建築人」とは、建築家、建築技術者、建築関連研究者・市民活動家など
建築や町を愛し、それらのより良いあり方を求めている人々を意味しています。

戦後の復興は日本にとっては輝かしい道でした。そしてアジア、世界に対しても目覚ましい発展を示しま
した。しかし、その道は持続可能な道ではなく、失ったものも少なくないものがありました。世界は日本
の暮らし方、日本人の文化に多くの共感を抱いています。そのような日本にあって、日本人である私たち
自身が失ったものを取り戻し、環境共生的・地球共生的な暮らし方、社会の姿を取り戻さなければなりま
せん。

そのように決意すると、これらすべてのキーワードは、「日本の木で木造建築をつくる」ことに尽きるこ
とに気がきます。

豊富な森林は豊富な水資源を生み出します。そのお陰で美しい山谷があり、溪谷を生み出し、なだらかに
広がる平野を作り出します。山のミネラルは豊かな海洋資源を作り出し、山海の資源を生み出すのです。
言い換えれば、総合的な生業として「観光」があるのです。日本の観光は、日本の伝統芸能や食の世界な
ども含め地球視野・世界視野での価値があります。木造建築の街並みはさらに美しい日本を生み出して
いくことでしょう。もう一つのキーワードは「生業の生態系の保全」（by三井所清典）です。

